

国際脳卒中学会 (ISC : International Stroke Conference 2013)



2011年と2013年に国際脳卒中学会で発表した
先輩方の研究を引き継ぎ、発展的な研究を進めています。

脳卒中の治療で推奨されるのは30度のベッドアップ。一方で、誤嚥性肺炎を予防するには45度のベッドアップが推奨されています。もしも30度以上で影響がなければ、45度でもいいのでは？という疑問から文献を調べてみたところ、30度の根拠となる臨床データがなかったことがこの研究の出発点です。先輩の看護師たちの研究で、30度の根拠となる臨床データが得られ、その結果をまとめた研究論文が狭き門と言われるISCに認められ、ロサンゼルスで開催されたISCで発表したのが2011年のことです。さらに症例数を増やして2013年にハワイで発表した時には私も参加し、その反響の大きさを実感しました。その後、先輩の研究を私が引き継ぐことになり、ISCから持ち帰った質問を発展させ、既往症や脳梗塞の部位・大きさによって血流の変化に特徴があるかどうか、起立性低血圧の原因となる自律神経の動きについてデータを取り研究を進めています。同じテーマを研究する海外の看護師たちと意見交換して驚いたのは、私たちの研究では早期離床に向けて安全なゾーンを見つけるための研究なのですが、海外では脳の血流維持のためなるべく起こさないほうがいいという考えで研究を進めていること。着目点も同じでも、考え方は正反対。海外の考え方をすることも研究の面白さにつながっています。



急性期で入院患者さんが多いため、症例数が集めやすく、
研究サポートも受けられる充実した環境があります。

実は、看護研究にはあまり興味を持っておらず、入社してから進んで研究しようと思う気持ちはなかったのですが、実際に海外での学会に参加してみると、想像以上に刺激を受けることができました。本当に行ってよかったと思います。大田記念病院では「やるならしっかりやりなさい」ということで、研究をする上で様々なサポートが用意されています。当院には研究所があって、そこに研究支援の方がいるので、テーマの選び方から研究方法の立案、データを取る際のアドバイス、統計の処理方法、さらに論文の英訳までサポートがあり、とても研究しやすい環境が整っています。学会で発表する時のポスターの作り方、レイアウトのやり方で教えてもらえます。当院は症例数が多く、根拠となるデータが集めやすい環境にあるので、次のISCで発表できるようにしっかりと研究を継続していきたいと思っています。



社会医療法人 祥和会
脳神経センター大田記念病院

2010年入職

井上 雅由

新人から集中ケアに携わることで経験値を上げ、診断の前段階から病状や症状を予測した看護に力を発揮している。